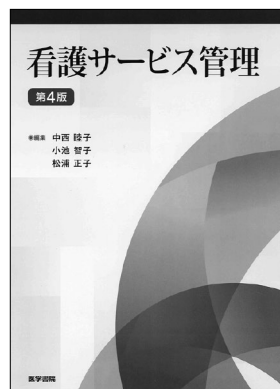


『看護サービス管理 第4版』 看護活動の内部の変化に 目を向けての改版で、 より幅広い読者に対応

編：中西睦子，小池智子，松浦正子／定価：2,940 円(本体 2,800 円＋税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



基礎教育の学生から看護管理者に至るまで、コンパクトながら幅広い層に対応する、言い換えれば長く使える良書の第4版である。

「第4版の序」によれば、今回の改訂では主として「看護活動の内部の変化に目を向けた見直し」が図られたといい、新たに4つの内容が追加されている。「第2章 看護サービス管理の基礎」に追加された「医療におけるコミュニケーション」(手塚千鶴子)は、「医療において連携する多様な専門職の人とのコミュニケーションは、異文化コミュニケーション」だと位置づけ、そこからコンフリクト対処とそのためのアサーティブ・コミュニケーションの必要性につないでいく流れが明快である。「第4章 日本の医療と看護サービス提供システム」には「在宅看護におけるマネジメント」(山田雅子)と「看護提供の組織システムのデザイン」(小池智子)が加えられた。「在宅看護におけるマネジメント」は、訪問看護の側については事業所の開設からマーケティングに至るまで、病院施設の側については退院支援・退院調整のあり方、そして全体を貫く地域医療連携の課題といったように、今日の重要課題である在宅介護をめぐる課題が短い項に見事に圧縮されている。

唯一残念だったのは「看護提供の組織システムのデザイン」の項である。タイトルからは組織化・組織デザインの原理や実践の記述を期待したが、

なぜか現在進行形の「チーム医療の推進」をめぐる政策的な動きの紹介にかなりの紙幅が使われている。仮にチームワーク、チーム医療のあり方から組織のあり方を解説したかったのだとしても、厚生労働省の検討会(チーム医療推進会議)などでよく言われる「医療専門職の役割の拡大と補完の強化」といった表現をそのまま無批判に用いることは、チーム医療・チームワークの学術的定義からみて非常に疑問であると同時に、テキストとしては不適切だ。

逆に出色だったのは、第11章「看護サービス管理における研究と教育」における「研究成果の看護サービス管理への応用」(松浦正子)である。前の3版では「看護管理者が行う研究」だった部分を全面的に書き換えたものだが、実践家である看護管理者こそ「研究を行う」よりもまず「応用」が大切だという指摘には大いに共感する。また、研究成果の応用とはすなわちEBM(Evidence Based Management)であり、EBMを「研究成果によって得られた入手可能な範囲で最も信頼できる根拠を把握したうえで、限られた資源のなかで行う看護管理のプロセス」だと定義し、その進め方とともに、近年普及しているベンチマーキングの手法についてもわかりやすく解説している。この項は、学生、教員はもとより現場の看護管理者にぜひ一読を薦めたい。